



FOUNDED 1905

茨城支部報

(No.4)

(社) 日本山岳会茨城支部 (JAC Ibaraki)

Ibaraki Section of the Japanese Alpine Club

2011(平成 23) 年 12 月 1 日発行

発行元住所 〒305-0045

つくば市梅園 2-21-21 浅野勝己方

目 次	
p. 1・・・第 8 回自閉症協力登山	p. 10・・・支部山行
p. 2・・・2010 年度の活動報告	p. 14・・・特別山行
p. 4・・・2011 年度の活動及び予定	p. 15・・・野外研修会
p. 6・・・2010 年度会計報告と 2011 年度予算	p. 16・・・3 支部合同懇親山行
p. 6・・・茨城支部規約	p. 17・・・新入会員挨拶
p. 8・・・茨城支部役員名簿	p. 20・・・個人山行
p. 8・・・茨城支部会員名簿	p. 22・・・あとがき

第 8 回茨城県自閉症協会への協力登山

—— 三国山登山を顧みて ——

茨城支部事務局長 浅野 勝己



昨年 8 月末の上高地“岳沢小屋”登山に次ぐ 4 回目の山行として、近隣の群馬県、栃木県および新潟県の 3 県の県境に隣接する“三国山”(1636m)を目指して登山することとなった。

日程：2011 年 7 月 31 日(日)～8 月 1 日(月)

参加者：総計 53 人(支部登山支援者:9 人)

17 人の自閉症者およびその父兄ら 27 人と我々登山支援の 9 人の総計 53 人は 7 月 31 日の早朝に大型バスにて土浦、水戸より約 4 時間を要して群馬県猿ヶ京温泉・清野旅館に到着した。

この途中に“赤谷湖の鏡”と称されるみなかみ町の“相俣ダム”を見学し、幸運にも放水中の光景を見る事が出来た。

また午後は旅館に隣接した室内ゴルフ場でゲートボールを一同で大いに楽しむ機会を得た。さらに夕食後には“紙芝居”と群馬のかたり部による“民話”を楽しみ時の経つのを忘れた。

翌日は早朝 6 時半にバスにて出発し、7 時より全員元気良く登山開始した。霧が深く見晴らしはきかなかつたが、10 時半に全員が無事に山頂(1636m)に立ち歓声を上げることが出来た。

途中、三国峠の御坂三神社前で上毛新聞社沼田支局の石原記者と会う機会を得た。彼女は我々の登山取材してくれており後日 8 月 6 日付けの上毛新聞への掲載記事(“集団生活を通して自立や積極性を促すとともに登山の達成感を味わう”)を送付して戴いた(右欄の写真入りの記事参照)。

今回の 17 人の自閉症者の中には 2009 年の第 1 回磐梯山登山以来より継続して参加されている方が何人かおられるが、総じて全員が登山に集中され嬉々として行動されている姿が印象に残るのである。

“登山による感激”がおそらく経年的に積み重ねられ“セロトニンの活性化”をもたらしているものと思われる。

今後とも出来る限り微力ながら自閉症者への登山支援のお役に立ちたいと考えている。

(編集者注:P14に本山行のリーダーであった諏訪会員の報告が掲載されています)

登山で達成感味わう

みなかみ 茨城県自閉症協会(高山孝信会長)の第33回夏期療育キャンプが、みなかみ町で開かれた。自閉症者とその家族ら53人が参加し、本県と新潟県境にある三国山登山を楽しんだ＝写真。

集団生活を通して自立や積極性を促すとともに、登山の達成感を味わってもらおうと開かれた。今回は雨で足場の悪い中、全員が登頂を果たした。登山では、日本山岳会茨城支部が協力した。



上毛新聞 (2011 年(平成 23 年)8 月 6 日(土)付け)

2010(平成 22)年度の活動報告

(事務局長) 浅野 勝己、(総務委員) 高木 康雄

(はじめに)

当支部は 2007 年 6 月に全国で 27 番目の支部として 21 人の会員で発足したが、現在 32 人となり、ほぼ隔月の講演会および山行を中心に意

欲的にクラブライフを盛り上げて来ている。すなわち今年度は創立 3 周年を迎え 4 回の講演会および 2 回の野外研修会、さらに 6 回の支部山

行と第2回海外山行を実施した。また特別山行として第3回と第4回の自閉症者協会への登山支援を行った。

講演会（会員以外の一般市民にも公開）

第16回(5月30日)「わたしのトレッキング体験・ヒンズークシュから横断山脈まで」内田会員(晚餐会で同席した縁で講師を依頼して講演を戴き、聴衆に感銘を与えた)

第17回(9月19日)「カラコルムとヒンズークシュでの最近1世紀における氷河の変動」長岡会員

第18回(11月28日)「エクアドル登山と中米の旅」茨城県山岳連盟 椎名正明氏(昨年に続いて2回目の講演を戴き、日山協との交流を一層深めることが出来た)

第19回(平成23年1月16日)「ダーウインの種の起源と人類の誕生」奥井会員

支部山行

第16回(4月18日)日立・風神山～真弓山(大竹L、奥井、高木、山本、西川夫妻)

第17回(8月15日～17日)北アルプス・有明山(西川L、諏訪)

第18回(10月18日)南会津・三岩岳(山本L: 6人参加)

第19回(11月20日～21日)北アルプス・僧ヶ岳(長通氏追悼)

第20回(平成23年2月23日)北茨城・鷹ノ巣山、高帽山(西川L、酒井、山本、高木)

第21回(平成23年3月5日)奥久慈・竈岩山～鷹取岩(山本L、高木、柳、諏訪、山田)

海外山行

第2回(8月3日～7日)中国北朝鮮国境の山・朝鮮半島最高峰・白頭山(2,744m)(茨城支部会員4人、千葉支部会員を含め計11人参加)

特別山行

第3回(8月28日～30日)上高地山岳研究所～岳沢小屋(2,170m)登山(茨城県自閉症協会協力登山)(35人の自閉症者およびその家族の登山を8人の会員が支援、JAC山岳研究所に2泊)

第4回(平成23年1月30日)筑波山(茨城県自閉症協会協力登山)(諏訪L、星埜、山田、協会から20人参加)

野外研修会（会員以外の一般市民にも公開）

第5回(10月17日)「南会津・紅葉とキノコ狩り体験教室」(きのこアドバイザー)杉山会員(11人参加)

第6回(10月23日)「愛宕山・森林植物観察会」(森林インストラクター)堀内会員(7人参加)

3支部(栃木・千葉・茨城)合同懇親山行

第4回(平成23年2月12日～13日)日光・鳴虫山登山と日光東照宮の世界遺産見学(栃木支部担当:日光市内ホテルにて講演会および懇親の集いがあり、翌日登山。

(登山グループ:高木、山本、和田、大竹、山田)

(日光東照宮グループ:浅野、奥井、西川、酒井、富田、諏訪、柳、石原)

2011 (平成 23) 年度の活動及び予定

(総務委員) 高木 康雄、(山行委員) 山田 明

講演会 (会員以外の一般市民にも公開)

第 20 回(4 月 10 日)「山づくりから始まる水質浄化」奥井登美子会員

特別セミナー(4 月 28 日)「今西錦司展」開催中の
国土地理院「地図と測量の科学館」にて
「登山と地図の見方」星埜支部長
「今西錦司さんのコラム探検の頃」長岡会員

第 21 回(6 月 26 日)「間宮林蔵の生涯と業績」
第 8 代当主 間宮正孝氏

第 22 回(9 月 11 日)「インド北部のチベット文化圏—ラダックとザンスカールの 1 世紀前から今日まで」 長岡会員

第 23 回(11 月 27 日)「ナノテクノロジーの科学と技術について」奥井会員

第 24 回(平成 24 年 1 月中旬)(予定)「全てがスムーズに行かなかったボリビア紀行」川久保会員

支部山行

第 22 回(4 月 13 日)茨城県北部・熊野山～高塚山縦走 (山本 L、西川、高木)

第 23 回(4 月 24 日)山梨・権現山～甲東不老山縦走 (西川 L 夫妻、高木、山本、齋藤、柴山)

第 24 回(4 月 29 日)茨城県中部・きのこ山・足尾山・丸山 (山田 L、奥井)

第 25 回(8 月 27 日～29 日)北アルプス・剣岳(山田 L、星埜、齋藤、杉山夫妻、飯田)

第 26 回(10 月 8 日～9 日)南アルプス前衛・七面山 (山田 L、星埜、木寺)

第 27 回(10 月 20 日夜行～23 日)十和田山、焼山～八幡平～茶臼山縦走 (西川 L 夫妻、高木、柴山、伊藤、山口、松井、井澤)

第 28 回(11 月 12 日～14 日)大源太山(山田 L、山本)

第 29 回(12 月 15 日)茨城・赤沢富士～金幣山(予定) (西川 L)

(注)平成 24 年 1 月以降も実施 (日程と山域は未定)

海外山行

第 3 回(6 月 24 日～7 月 18 日)サハマ峰・イリマニ峰 (ボリビア) (埼玉・茨城合同登山隊(川久保))

特別山行

第 5 回(6 月 4 日)筑波山 (茨城県自閉症協会協力登山) (諏訪 L、奥井、齋藤、山田、協会から 23 人参加)

第 6 回(6 月 19 日)筑波山 (茨城県自閉症協会協力登山) (諏訪 L、星埜、奥井、柳、山田、協会から 12 人参加)

第 7 回(7 月 2 日～3 日)三国山下見 (茨城県自閉症協会協力登山) (諏訪 L、酒井、高木、齋藤、山田)

第 8 回(7 月 31 日～8 月 1 日)三国山 (茨城県自閉症協会協力登山) (諏訪 L、星埜、奥井、浅野、柳、高木、齋藤、石原、山田) (協会から 44 人、介助 2 人計 46 人参加)

野外研修会（会員以外の一般市民にも公開）

第7回(5月21日)「茨城県民の森・春の植物観察」(堀内 L、奥井夫妻、西川夫妻、酒井、齋藤、山田)

第8回(9月27日)自然観察会「国営ひたち海浜公園・海浜植物と海岸林観察」(国営ひたち海浜公園・ひたちなか市)(堀内 L、高木、山田)

第9回(10月16日～17日)大嵐山登山ときのこ

狩り「南会津・大嵐山登山とキノコ狩り体験教室」(杉山 L、山田、斉藤、高木、長岡、柳、他一般参加4人)

第10回(11月18日)「茨城県北部・陰陽山の自然観察会」(森林インストラクター)(堀内 L、齋藤、高木、山本、西川夫妻)

3支部(栃木・千葉・茨城)合同懇親山行

第5回(平成24年2月11日～12日)南房総市大房少年自然の家(千葉支部担当)

「北蝦夷地図」は7枚、計14枚 船をかつぎ100キロも歩く

間宮正孝さん、林蔵を語る土浦



間宮正孝さんの熱意を語る林蔵の歴史
～土浦市大和町の県立南房総高等学校～

日本山岳会茨城支部は創立40周年記念特別講演会として、土浦市大和町の県立南房総高等学校で講演した。講演者は、間宮正孝さん(67歳)で、大塚とカラフトの間を海を渡り、開闢地として名を残した林蔵。『北方の開闢地』(林蔵の伝説と真実)と題し、林蔵のたどったルート、完成させた『蝦夷(えぞ)』などについて、解説した。

林蔵は、開闢・測量のため北海道で初めて乗組船へ乗った。カラフト探検に本格的に乗り出したのは、ロシア軍がエトワ島のシナナを占領したシナナ事件(1880年)がきっかけという。開闢地探検を前に、この

半年間の探検に出かけた。カラフトでは約100キロにわたって、船をかついで歩いた。サンタム船で件いとはいえず、船も大破だったと思え、船もあつた。

この探検では、大塚をきき船にいた清國の役人と顔を合せて情報交換。当時、この地域にはまだけぞの支配が及んでいないことを確認した。

測量方法は、測量機に使う「天体観測」をして自分のいる位置が正確に分かる。船もかなり正確になった。これは

先陣計画、素直な少人数の探検を紹介。また、『開闢地』ながら三冊開闢は順調で行い、船の動きをきき、たのび、と述べた。

ほかに、林蔵のデッサンを描いて描いたと思われる『船内図』には、清國の役人と顔合する林蔵の姿が見られる。船も力をいれて時分をかき、つなげると、開闢地は「天体観測」をして自分のいる位置が正確に分かる。船もかなり正確になった。これは

現在、北蝦夷地図とは、王も手渡さないこと。開闢地、シボルがカラフト地図を海外に持ち出そうとした。シボル事件(1888年)で、その後は、シボルが各書の中で『開闢地』(正孝の世)の名を世界に知らしめた。

開闢の最中、『林蔵は開闢時代にあって、外国の人間と決別した。日本人だ。最後まで開闢の役人として、開闢でなくなった。』と述べて、開闢地を

第21回講演会
「間宮林蔵の生涯と業績」
間宮正孝氏
(常陽新聞 2011年7月9日付け)

2010(平成22)年度会計報告と2011(平成23)年度予算

(経理委員) 西川 元禧

2010(平成22)年度会計報告

収 入 の 部	
前期より繰越	73,073円
支 部 費	45,000円
支部助成金	72,500円
その他収入	10円
収 入 合 計	190,583円

支 出 の 部	
会 場 費	13,350円
郵 送 料	17,980円
印 刷 費	5,670円
支部報発行費	57,540円
山 岳 会 旗	33,075円
事務用品・雑費	16,040円
支 出 合 計	143,655円

差引次期へ繰越	46,928円
---------	---------

平成22年度 会計報告については、
荒木浩二、富田郁夫の両監事より
適正である旨の監査意見を受けています。

2011(平成23)年度予算

収 入 の 部	
前期より繰越	46,928円
支 部 費	50,000円
支部助成金	77,500円
その他収入	0円
収 入 合 計	174,428円

支 出 の 部	
会 場 費	20,000円
郵 送 料	20,000円
印 刷 費	7,000円
支部報発行費	80,000円
事務用品・雑費	20,000円
一	一
支 出 合 計	147,000円

差引次期へ繰越	27,428円
---------	---------

(注) 支部会費(年会費) 1,500円
支部会友費(年会費) 2,000円
支部入会費 1,000円

(社団法人)日本山岳会茨城支部規約

(名称)

第1条 本支部は、社団法人日本山岳会茨城支部
(Ibaraki Section of the Japanese Alpine Club) という。

(事務所)

第2条 本支部は、事務所を茨城県内に置く。

(目的および事業)

第3条 本支部は日本山岳会定款第3条に定められた目的に則り次の事業を行う

- (1) 会員相互の親睦の為の会合、山行
- (2) 登山の指導奨励に必要な集会、研究会および講習会等の開催
- (3) 自然保護活動の推進
- (4) 支部機関紙の発行
- (5) 目的を同じくする他の団体との連絡および協力
- (6) その他、目的を達するために必要な事業

(会員)

第4条 本支部の会員は、茨城県に在住、在勤、在学し支部に入会を希望する日本山岳会会員（以下会員という）、又は本支部規約の趣旨に賛同し、支部に入会を希望する会員とする。

(役員)

第5条 本支部には、次の役員を置く、支部長 1 人、支部長代行 1 人、事務局長 1 人、総務委員、経理委員、広報委員、各 1 人、山行委員 2 人、ネットワーク委員 1 人、監事 2 人、自然保護委員 3 人、合計 14 人。

(役員の選出および任期)

第6条 本支部の役員は、総会において支部会員の中から選出する、役員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。

(役員の任務)

第7条 役員の任務は次の通りとする。

- (1) 支部長は、本支部の業務全般を管掌し本支部を代表する。
- (2) 支部長代行は、支部長を補佐し、支部長不在の時は支部長を代行する。
- (3) 事務局長、総務、経理、広報、山行、ネットワークの各担当委員は、支部の運営について支部長と協議し業務を執行する。

(4) 自然保護委員は、本部と連携し、自然保護活動に率先垂範し、意見具申と具体策について支部長ならびに支部と協議し業務を執行する。

(5) 監事は、役員の業務及び支部の会計を監査し毎年総会に報告する他、各種会議に出席し、意見を述べる事ができる。

(会議)

第8条 本支部には総会および委員会を置き、総会を以て本支部の最高議決機関とする。

(1) 通常総会は、毎年 1 回支部長が招集する。但し、支部長、支部長代行、監事または委員が必要と認めたときは、支部長は臨時総会を招集することができる。総会の議長は支部長とする。

(2) 次の事項は総会の承認を受けなければならない。

- ① 事業計画および収支予算に関する事項
- ② 事業報告および収支決算に関する事項
- ③ 支部規約の設定、改廃
- ④ その他委員会で必要と認めた事項
- ⑤ 委員会は、原則として毎月 1 回支部長が召集する

(会計)

第9条 本支部の事業遂行に要する費用は、支部会費、寄付金その他の収入を以て支弁する。

(支部会費および入会金)

第10条 支部会員の入会金は、1,000 円とする、また年会費は 1,500 円とし毎年 6 月末日までに納めるものとする。支部会費を未納の会員には、会報その他の連絡を停止することがある。

(支部特別会員の会費および入会金)

第11条 支部会員のほかに、支部特別会員（支部友）の参加を認め、その入会金は 1,000 円、年会費 2,000 円とし毎年 6 月末日までに納めるものとする。

支部会費を未納の特別会員には、会報その他の連絡を停止することがある。また、支部特別会員は茨城支部の活動に参加の範囲を限定されるものとする。ただし、支部長の判断により、本部行事への参加、情報、などは協議できる。

(会計年度)

第12条 本支部の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

(規約の変更)

第13条 本規約の変更は、総会において出席者の3分の2以上の議決を経なければ変更することができない。

付則 本規約は、2008年6月15日より施行する。

日本山岳会茨城支部役員名簿

茨城支部事務局・つくば市梅園 2-21-21 * 浅野事務局長宅 TEL&Fax029-851-0015

支部長 : 星 埜 由 尚 (13985)
支部長代行 : 奥井 清 (4999)
事務局長 : 浅野 勝己 (12875)
総務委員 : 高木 康雄 (10679)
経理委員 : 西川 元禧 (11916)
広報委員 : 川久保 忠通 (14221)
山行委員 : 山本 幸生 (10196)

山行委員 : 山田 明 (14506)
ネットワーク委員 : 長岡 正利 (10752)
監事 : 富田 郁夫 (8491)
監事 : 荒木 浩二 (11897)
自然保護委員 : 堀内 孝雄 (11526)
自然保護委員 : 和田 光弘 (12154)
自然保護委員 : 山口 定男 (9760)

日本山岳会茨城支部会員名簿

(アイウエオ順)

会員 32 人 (退会 2 人、増員 3 人)、 会友(特別会員) 5 人 (退会 1 人、増員 1 人)

【インターネットでの閲覧版では、
この部分は割愛しています。】

【インターネットでの閲覧版では、
この部分は割愛しています。】

【インターネットでの閲覧版では、
ここまでの部分は割愛しています。】

支部山行

(第 23 回) 山梨・権現山～甲東不老山 縦走

西川 元禧

茨城支部の 4 月山行として、山梨県・中央線沿線の権現山～甲東不老山を縦走しました。

期日：平成 23 年 4 月 24 日(日)日帰り(快晴)

参加者：西川元禧 L、山本幸生、齋藤貞雄、高木康雄、西川 道子、柴山 武(ゲスト・千葉支部会員) (合計 6 人)

行動記録：

牛久駅 5:34 の電車に乗ると齋藤氏が既に乗っていて、更に取手駅で山本氏が乗り込み、上野駅で乗り換えて神田駅 6:55 発ホリデー快速

で高尾駅へ。高尾駅 8:01 発の甲府行きに乗り換えて猿橋駅に 8:42 到着した。ここで柴山氏と合流、タクシー 2 台に分乗して登山口に向かった。

登山口を 9:30 出発し、浅川峠に 10:15 到着。ここから権現山迄の急登を頑張って、11:55 権現山頂上(1312m)に到着した。2 等三角点があり、晴天に恵まれ青空の中、南には富士山を、北側には甲武信岳、雲取山など奥秩父連峰の素晴らしい展望を眺めながら昼食を楽しみ、12:35 頂上を後にする。5 分程下った所に山名の由来である大室権現社がある。

更に下って 13:05 和見分岐に到着。ここから頂上に 3 本の鉄塔が建つ雨降山(1177m)まで往

復、13:25 分岐に戻って和見峠方面へ下り、林道が稜線を分断している峠に 14:00 到着し小休止。更に登り返し、ゴウド山(887m)を経て高指山(911m)に 14:35 到着。更に進み甲東不老山(839m)に 15:00 丁度に到着。ここは展望が素晴らしいので小休止。南西方向には雪を戴いた富士山が高く、南方・眼前に、どっしりした山容の御正体山を始めとした道志山塊の山並みを手前に従え、背後には丹沢の蛭ヶ岳、檜洞丸、大群山、加入道山、畦ヶ丸、菰釣山 等の山々が見渡せて、山名を同定するのに忙しい。

名残惜しい眺めを後に下山開始。16:05 不老下バス停に到着。今日は約 6 時間半の行程でした。16:25 発のバスで上野原駅に向かい電車で東京へ戻った。



権現山山頂

(第 26 回) 七面山登詣登山

星埜 由尚

期日：平成 23 年 10 月 8 日～9 日

参加者：山田 L、星埜、木寺

行動記録：

七面山は、身延山地の奥深く、富士川の支流早川に注ぐ雨畑川と春木川に挟まれて聳える 1989m の信仰の山です。山頂は二つの小さなこぶからなっており、最高所は 1989m ですが、二

等三角点は 1982.42m で三角点のあるところが山頂とされています。七面山の東斜面には大きな崩落崖があり、山頂部への侵蝕が進んでいます。地形図を見ればわかりますが、山頂部は、比較的緩傾斜で、敬愼院のあるところは、大規模な岩盤滑りの結果形成された緩傾斜地であるとの印象を地形図からは得られます。

七面山は、身延山久遠寺の西裏鬼門に当たり、七面大明神が棲む山で、法華経の根本道場を護るために日蓮の高弟日朗上人が開いたと言われており、永仁 5 年(1297) 9 月 19 日、日朗聖人と日円上人が七面山登山を果たし、七面大明神を祀ったと言われています。七面山由緒によると、七面山に住む七面天女は、龍の化身で、身延山の鬼門をおさえて、山を護る法華経の護法神として、人々に心の安らぎと満足を与える存在であるとされています。この七面天女が七面大明神であり、敬愼院の本尊として祀られています。

敬愼院は、身延山久遠寺に任命された別当が管理し、七面大明神を祀る七面山本社を中心に、池大神宮、願満社、参籠殿などが並んでいます。全てしめ縄が張ってあります。背後には、一の池という大きな池があり、七面大明神が龍の姿で現れたという信仰の対象の池でもあります。このように説明すると、敬愼院は神社であると思われますが、七面大明神の前では日蓮宗の僧侶が法華経を読み、仏事を行っています。

敬愼院は、典型的な神仏混淆の寺院で、誠に不思議な感を得る場所です。元々七面山は日朗上人が山を開く以前から修験道の行の場で、後に日蓮宗の身延山と習合したと考えるのが最も理解しやすいと思います。七面大明神は女性で、法華経の女人成仏と結びつきやすかったのでしょう。我々は、敬愼院に泊まりましたが、ちょうど連休で、大勢の日蓮宗信徒が泊まっていたが、女性が多い印象を受けました。

また、七面山ももとは女人禁制の山でしたが、徳川家康の側室お萬の方が日蓮宗の熱心な信徒で七面山に登ることを切望し、辛苦の末それを果たしたので、その後女人禁制の禁が解けたと言われています。お萬の方の像は、麓の羽衣という集落にあり、遺品が敬愼院の宝物となっています。法華経の女人成仏という考え方が江戸時代の身分の高い女性の信心を引き出したのでしょう。その伝統が現在にも引き継がれているとの思いを今回の登山で感じました。

我々は、大した信仰心もなく、七面山の山頂を極めるという目的で登ったわけですが、宿泊は七面山の宿坊以外にはありません。朝早く自宅を出て、昼前には身延駅に着いてそこからタクシーで登山口の羽衣まで行きました。ちょうどこの度の台風により土石流がだいぶ出たようで、身延線も身延と西富士宮の間が不通でした。登り口の所には、土石流に埋まった車がありました。羽衣から敬愼院までの登山道は表参道で、よく整備されており、道幅も広く快適な登山道です。但し、桧などの樹林で見晴らしの良いところはあまりありません。途中に、下から神力坊、肝心坊、中適坊、晴雲坊の4箇所の坊があり、休憩所となっています。下から一丁目から五十丁目までの道標があります。ちょうど12時に登山口を出発して3時25分に敬愼院に到着しました。

敬愼院宿坊では、生臭物は食べられません。食事でも質素な野菜の煮物とひじきと言った一汁二采です。但し、御神酒が出ます。二合

の徳利に入った御神酒が五人程度に一本の割合で出ます。美味しくいただきました。食事が済むとご開帳、引き続いて夕のお勤めがあります。ご開帳は、本社に祀られている七面大明神



表参道の道標



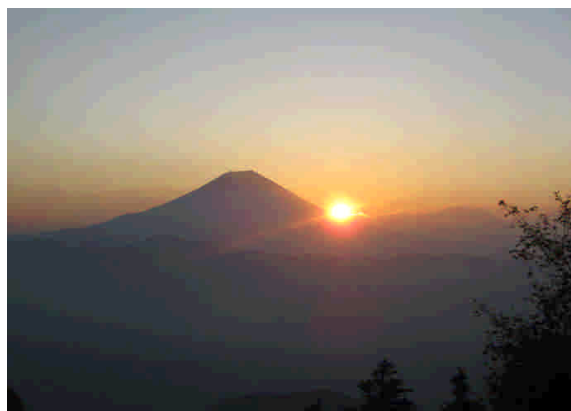
敬愼院七面山本社

の像を開帳し、僧侶が読経して我々参加者は焼香します。仏事です、拝まれるのは神様です。夕べのお勤めも仏事で、別当の僧侶が挨拶します。その後、希望者は裏の釈迦殿で宝物の見学ができます。この日は連休の一日とあって、団体の参拝者が多く非常に込んでいました。寝るときは、細長い巻物のような布団を敷き、何人もの人が潜り込んで雑魚寝します。



精進料理と御神酒

翌日は、朝5時起床、ご来光を拝みます。七



御来光

面山本社の建物は東を向いており、その方角に隨身門があります。その前に広場があり、ちょうど東に富士山が見えます。この日は、天気がすばらしく、富士山の南の裾野から太陽が上がる様子を見ることができました。ご来光には日蓮宗宗徒の人々が広場を埋め尽くし、「南無妙法蓮華經」の大合唱で宗教的熱狂を感じました。

その後、朝食を取り、6時半に出発して7時15分に七面山山頂三角点に登り着きました。最高所の1989m地点にも登り、敬愼院に引き返し、もと来た道とは違う北参道を奥の院、明浄坊、栃之木安住坊を通して麓の角瀬集落の神通坊に12時40分に到着し、下部温泉に出て帰宅しました。

日頃宗教に関する信仰心も浅い即物人間ですが、山と宗教には密接な関係があることを感じます。特に近代登山が行われる以前は我が国では修験道が登山目的であり、近世においても登山は霊場めぐりの一環でした。神仏混淆が当たり前であった時代の名残を留めているのを見て、改めて山と宗教の関係と神仏習合の意味について再認識した次第です。



御来光を見る日蓮宗宗徒の人々



七面山（敬愼院から）



七面山二等三角点

（第27回）十和田山、焼山、八幡平

西川 元禧

期日：平成23年10月20日（木）夜行～23日（日）
（夜行2泊3日）

参加者：8人

（会員）西川 元禧 L、高木 康雄、西川 道子
（ゲスト）柴山 武、伊藤 正之、松井 洋子、
井澤 順子、梅林寺 智子

行動記録：

20日（木） 東京駅八重洲南口 21:30 発 青森行き夜行バスに乗車。

21日（金） 青森駅前に7:00 到着。駅前7:50 発のバスに乗り換え、懐かしい八甲田の山々を眺め、奥入瀬溪谷の溪流や滝、紅葉を鑑賞しながら十和田湖畔の宇樽部バス停に10:35 到着。身支度を整え10:45 出発。登山者が少ないため登山道の両側から笹が覆う。途中で昼食



十和田山頂上

を摂り 13:35 十和田山(1054m・東北百名山) 山頂に到着。360 度の展望で、眼下には十和田湖、隣には戸来岳、十和利山、対岸の白地山や岩木山、八甲田山などの眺めが素晴らしい。13:50 下山開始、宇樽部登山口に 15:20 に戻り、十和田湖休屋でバスを乗換え、今日の宿泊地、鹿角花輪駅前に 17:38 到着。夕食は地酒を飲みながら本場のキリタンポ鍋や比内鶏に舌鼓。

22 日(土) 鹿角花輪駅前 7:32 発のバスで玉川温泉 8:44 到着。身支度を整え 9:00 随所に噴気が湧く地獄谷を出発し、いきなり階段が続く。その後は全体としてゆるやかな登りで、紅葉の樹林をひたすら登り、11:30 焼山(1366m・東北百名山)山頂に到着。ガスで眺めも無いので 11:35 下山開始。途中、小さな火口湖がいくつか現れ、やがて 12:05 避難小屋に到着し、ここで昼食。12:45 小屋を後にし

てガンコウランやコケモモに被われ広々とした地形の毛せん峠を経て一路、後生掛温泉へ下る。15:20 到着後、温泉周辺の泥火山、大湯沼など噴泥、噴湯の地獄巡りを 約 1 時間かけて散策。

23 日(日) 今日は八幡平(1614m)～源太森(1591m)～茶臼岳(1578m)縦走の予定だったが、朝から雨のため断念。温泉 8:51 発のバスで八幡平頂上バス停まで行き 9:18 到着、バス停傍のレストハウスで休憩。希望者のみ雨上がりの霧の中、頂上周辺を 1 時間散策し、昼食を済ませて 12:30 発のバスで盛岡駅前に 14:52 到着。盛岡駅から 15:16 発の新幹線に乗車。車内ではビールや酒を片手に反省会。車窓からは姫神山、岩手山、秋田駒ヶ岳、和賀山塊、栗駒山、蔵王、吾妻連峰、安達太良山などの山波を眺めているうちに上野駅に 18:22 到着。

特別山行

(第 8 回) 三国山(茨城県自閉症協会協力登山)

――転んでも笑顔の三国山登山――

諏訪 肇

期日：平成 23 年 7 月 31 日～8 月 1 日

参加者：諏訪 L、星埜、奥井、浅野、柳、高木、齋藤、石原、山田)

(協会から 44 人、介助 2 人計 46 人参加)

行動記録：

茨城県自閉症協会との協力登山が猿ヶ京で行われ無事終了しました。茨城支部では磐梯山、上高地、今年の三国山と 3 回目となり、自閉症の自覚や積極性を登山行為を行うことで貢献できたと自負しています。

三国山登山に備えて支部会員は全力で取り組みました。トレーニング登山として筑波山へ 6 月 4 日、19 日と 2 回行い、自閉症協会 43 人、支部会員 8 人が参加しました。猿ヶ京キャンプ

の下見登山を 7 月 2 日、3 日と高木・斉藤・山田・酒井・諏訪の 5 人で行い、三国山登山、旅館との打ち合わせを行いました。

こうして「第 33 回夏季療育キャンプ in 猿ヶ京」は 7 月 31 日～8 月 1 日実施されました。参加者は自閉症協会 42 人、茨城支部から星埜支部長・奥井代行・浅野事務局長・高木・斉藤・山田・柳・石原・諏訪の 9 人が参加し、7 月 31 日大型バス(1 号車)は土浦駅東口 7 時 45 分支部員 9 人乗車し、水戸ドライブインでハイエース(2 号車)と合流し、猿ヶ京温泉・清野旅館へ 12 時 30 分到着し、昼食のカレーライスを食し、ミーティングを行う。夕食時間までラウンドゴルフ、自由時間で入浴し、食後アクティビティー「民話を聞こう――群馬の語り部」を聞き、自由時間はカラオケ、子供達が純粋なまっすぐな目で歌ったり踊ったりしている姿に感

動しました。

8月1日早朝、天候小雨の為、山田・斉藤氏2人で下見登山を行い、その結果をミーティングし、峠まで全員登山した後状況判断をし、山頂をめざすこととしました。

登山編成について7月30日、斉藤・山田氏と私で参加者名簿を検討し、先頭山田、中間斉藤、ラスト諏訪が担当し、他の支部員は適宜の行動にしました。

三国峠、三国権現避難小屋まで全員登山し、体調の様子を見るが全員張り切っている。峠から先は木製の階段となりかなり滑る。展望はガスで見えないが高山植物が足下を慰める。

山頂 1636m、三角点と鐘があり、小広いが全員が登頂し満員の状態である。子供が蜂に刺される。素早く奥井代行から頂いた薬品で保護者の看護婦さんが治療し安堵する。

小憩しての下山を開始する。3グループにして会員が3人でガードする。私は後尾グループに付く。雨で足場の悪い中、全員が登頂を果たした事を想って歩いていたら肥満気味の母親がスッテンコロリ、それを見ていた娘さんが2回転する。私がそれを下で受け止める。転んだ娘さんは起き上がると笑顔で歌を口拍子、それを見ていた石原氏がスッテン、私は足場を教えていながらスッテンとなる。補助ザイルで確保することを考えるがトコロテン式に転がる心配もあり、慎重に下るよう大声で伝える。三国峠まで全員下山する。トップは増子貴也さん、

年長の細川さんは峠で待機することであったが登頂、とにかく全員がガンバリました。上毛新聞8月6日付に日本山岳会茨城支部の協力で三国登山を楽しんだと写真付きで報道がありました。

昼食を旅館で済ませて近くの相俣ダムを見学する。支所長は荒木氏で、日本山岳会員で私の後輩ですが、休日の中「ダム天端」見学組と「資料室」説明組と2班に別れ、所員の説明に真剣に聞き入っていました。

18時30分水戸ドライブインで解散する。

今年の登山は足場の悪い中での登山であったが、一人の落伍者もなく全員登頂は支部会員のしっかりした協力登山であった。明年4月には公益法人日本山岳会となると活動の公益が求められるでしょう。茨城支部活動として明年の乗鞍岳登山(予定)にしっかりとサポートして療育キャンプを成功に導きたいと考えます。



野外研修会

(第9回) 野外研修会「きのこアドバイザー杉山会員によるキノコ採り体験教室」 長岡正利

期日：11月16日：南会津の大嵐山登山

17日：同・高畑スキー場でのキノコ採り

参加者：山田(登山L)・杉山(きのこL)・斉藤・

高木・長岡・柳、ほか一般の参加4人

16日は、登山口に全員集合して、夜来の雨が上がった中を、紅葉の始まった道をたどって、

2時間半で山頂へ。ふだんから登山者の訪れがあまりなさそうな、静かで良い山でした。

下山後は、湯の花温泉に入浴して、以前から定宿としている「民宿りす」へ。地震復興の村補助があって、宿泊費は4千円を下回りました。

翌17日は民宿のご協力も得て、「きのこア

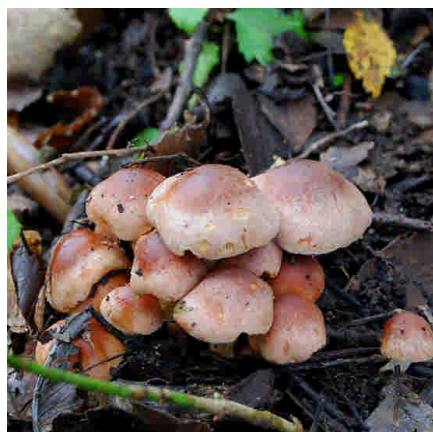
ドバイザー」杉山さんの案内で、高畑スキー場でのキノコ採りへ。例年に比べて秋の深まりが1月ほど遅れているようで、キノコも少ない由でしたが、収穫はほどほどに。

両日の状況は、写真が一番と思いますので。



大嵐山への登路（両面シダの茂るブナ・ミズナラ林）と、山頂。

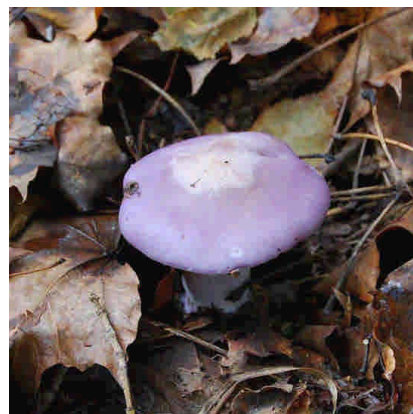
民宿のある大桃地区の国指定重文・能舞台



いかにも栗の実の「クリタケ」



猛毒の「ベニテングダケ」出始め



色が美しい「ムラサキシメジ」



左写真は、収穫を終えて。背景左は三岩岳
上は、2時間でこの程度の、長岡収穫品。

3 支部 (栃木・茨城・千葉) 合同懇親山行

筑波山のブナ林と霧氷

(第3回栃木・千葉・茨城JAC3支部合同懇親山行) 堀内 孝雄

筑波山は早春の芽吹き、初夏の新緑、秋の紅葉など楽しい自然観察の場ですが、真冬の霧氷もすばらしく、多くの人に見てもらいたいと思っています。

平成22年2月7日（日）は、第3回栃木、千葉、茨城の日本山岳会3県支部合同懇親山行の日でした。夜が明けると早速「ホテル一望」の部屋から筑波山を眺めました。天気は快晴。男体山から女体山の山頂付近は雪が降ったように白く輝いていました。

筑波神社参拝後、私たち筑波山自然研究路散策班13人は宮脇駅から9：20発のケーブルカーに乗車しました。山頂駅について驚きました。御幸ヶ原は雪に覆われ、ブナ林はそれはみごとな霧氷の世界。しばし真冬の筑波山の自然の造形に見とれました。

筑波山自然研究路は男体山の肩あたり、標高750～800m付近のブナ帯を一周するようにつくられた散策コースです。雪を踏んで自然研究路に入りました。そして足元に注意し、霧氷に輝くブナ林を眺めながら、ブナ、イヌブナ、ミズナラ、リョウブ、ウリハダカエデ、アカシデ、チドリノキ、クマシデ、トウゴクミツバツツジなど多くの冷温帯落葉広葉樹林を構成する木々の樹形、木肌、冬芽などを観察しました。とくに、男体山南斜面では、ブナに隣接して生

育する温暖帯常緑広葉樹のアカガシ、常緑低木のシキミ、針葉樹のモミなど落葉広葉樹林帯に入り込んだ常緑樹を観察しました。また、ブナ林の林床のササは南斜面ではスズタケが生育し、北斜面ではミヤコザサに変わっているなど、森林植生の違いを観察しながら雪の遊歩道を歩き、図らずも雪山登山を楽しむことができました。

自然研究路散策後、女体山頂に登りました。登山道の雪は踏み固められていてまさにアイスバーン。この日ばかりは筑波山のハイキングコースは危険な冬姿となっていました。

13:00 山頂駅発のケーブルカーで、下山しま



筑波山の霧氷 (2010.2.7)

した。

新入会員挨拶

最近歩いた山～梅海新道を往く

井上 宏

登山歴はせいぜい20数年。山を始めたのは会社の先輩で入社時から懇意にして頂いていた西川会員に山に誘って貰ったのがきっかけです。今でも山の好みは、西川さんの影響を色濃く受けていると感じます。その後、某山の会に入って、岩や沢に熱心に通った時代もありましたが、最近は年齢もあり、縦走や近郊地図読み

山行に回帰しつつあります。現在の山行は月平均2～3回のペースですが、一度は行ってみたい山が数多ある一方、同じ山を季節を変え又ルートを変えて歩く魅力に気付き始めています。つくづく「山に支えられて生きている」と感じる私ですが、80～90歳になっても元気に山を歩き回られた三浦敬三さんが今後の大きな目標です。

以下は、8月に行った梅海新道の山行報告で

す。内容・文章とも拙くお恥ずかしいものです
が辛抱してお読みいただけましたら幸いです。

3月11日、未曾有の大震災が東北地方を襲った。テレビの画面は津波が沿岸の街を一気に飲み尽す凄惨な光景を映し出していた。行方不明者を含め約2万人の命が一瞬に失われた。あまつさえ、これに追い打ちをかけるように福島原発メルトダウンの大惨事。計画中の春山やスキーは当然全部中止した。意気阻喪し、山へ出掛ける気にならなくなった。頻繁にある大きな余震や放射能汚染も怖く、自宅で悶々と過ごす日々が続いた。今、日本列島は大地動乱の時代に入り、東海地震・東南海地震がいつ起こってもおかしくない状況と云われる。人生は無常である！人生観が変わった。行きたい山はウジウジせんと行ける間に早よ行ってしまえ！その第1号が梅海新道である。

誘いあって平均年齢58歳の4人パーティを編成した。行程を一日縮める為に日本海側から回り込んで朝日岳に入るルートを取ることにした。新潟・福島地方の連日の大雨で鉄道はズタズタになり又も山行中止かとはらはらしたが、なんとか決行することにした。山行前日の8月10日、4人のうち2人は、不通のほくほく線を迂回して信越本線回りで富山に入った。

8月11日(金) 曇

前夜、駅前の飲み屋で大いに盛上った2人は荒い息を吐きつつ夜行バスで到着の残り2人と朝5時半に合流し、富山駅から泊駅へと逆戻り。タクシーで小川温泉を経て北又小屋に入る。地元中学校の集団登山日に重なり小屋前の広場は大混雑。中学生とサポーター約200人が、我々と同じコースで朝日岳へ登るという。中学生を全員やり過ごしたあと、登山口を出発したのは8時を過ぎてからになった。イブリ山までは標高差1,100mの木立に囲まれた急登で、鈍った体に縦走装備一式を詰めたザックが背中にズッシリ重い。樹林と笹に囲まれ展望のないイブ

リ山の山頂を過ぎると緩やかな登りが暫く続き、やがて湿原の中の爽やかな木道となる。日本海の夕日が美しい筈の「夕日が原」は霧の中で何も見えず。お花畑と残雪を眺めつつジグザグに登って前朝日を左へ大きく巻き、午後2時頃に朝日小屋に到着する。小屋は中学生で貸切状態の為、我々の寝場所は対面の管理センター2階。夕食はいつも変わらぬ女主人の心尽しだが、行列しカレーライスを待つ中学生に早々に席を譲り、早々に室に引き上げる。階下の自家発電設備の余熱でか暑くて寝苦しい夜だった。

8月12日(金) 晴

小屋を午前5時30分に出発して、朝日岳を目指す。空は快晴で朝焼けも美しく、高山植物におりた露が朝日に反射してその綺麗なこと。朝日岳の山頂には1時間程で着く。白馬山頂から五輪尾根を下った昨年9月は激しい風雨で視界ゼロの中を這うように歩いた所、今日は剣から槍まで360度の大展望である。吹上のコルで五輪尾根へ向かう道と分かれて北へ向かう。ここから長梅山、アヤメ平、黒岩平まではよく整備された木道が続き、処々残る残雪が青空と草原の緑に映え、流れ来る霧に点在する池塘とまさに山上の楽園である。しかし、黒岩山からは周りの風景は一変し、黒っぽい地面にザレが転がる殺風景な道となる。文子の池で昼前に出会った青年には驚いた。「今朝、親不知観光ホテルを登ってここまで来た」と聞かされたがほんまかいな！灼熱の太陽に照らされてひたすら下を向いて歩く。去年の炎熱飴はニチャニチャと気持ち悪いが、効き目はまだ健在でダランとした体がこれを舐めると気のせいかシャキンとする。道を覆う笹をきれいに刈払った縦走路は梅海新道を拓いたサワガニ山岳会の献身の証。しかし、足元からまたしても蛇が出る。なんでここはこんなに蛇が多いのか！道はアップダウンを繰り返してサワガニ山の山頂へ。ここからは緩やかな下りとなってやっと辿り着いた鞍部には「北又の水場」の標識が立つ。水場へ

5分ほど下り、夕食・朝食の水と明日の飲料水を容器に満杯に汲む。犬が岳山頂までの木の根を掴んで登る炎天下の急登は辛かった。滝のような汗がザアザアと流れる。よくこんなに汗が出るものだ！日射を遮ってくれるまばらな木陰の通過時だけが一瞬のオアシスだ。犬が岳からは拇海山荘の赤い屋根が眼下に見え、間もなく着いたこの避難小屋の泊り客は我々を含めて9人。2階に駆け上がって飲んだ焼酎の水割りのその旨かったこと！この夜は、窓を開けたまま寝た。心地よかった。満点降るような星空だったそう。

8月13日(土) 晴

4時前に起床して朝食後5時に出発。東の方角には火打と妙高が朝日に輝き、今日も好天で暑くなりそうだ。北に延びる尾根道を約1時間ぐんぐん下ると黄蓮の水場。いつもはターザンのように強靱なW氏の体調がすぐれず心配である。連日の激務と夜行バスの疲れが出たか？しばらく大休止してこのあと歩行ペースを落とす。菊石山、下駒岳と上り下りを繰り返して白鳥山への急登。白鳥小屋は手入れが行届いた気持ちのいい避難小屋だが天気は良くまだ時間も早い、先を急がねばならない。ひたすらの下りが続き、ますます低山里山歩きの雰囲気が強まる。唯々暑さとの戦いである。シキ割の水場で水をかぶり、急坂を一気に下るとそこは坂田峠。林道が交差し、その気になれば泊からタクシーを呼べるが、何とか全員で完走を果したいと皆でW氏の荷物を分担して、尻高山までの緩やかだが長い登りにかかる。尻高からは殆ど平坦な林の中の道が延々と続く。楽しみにしていた日本海の眺めは全くなく、虫に噛まれまくった足が痒うてたまらん。やがて林道が再び横切り、少し登り返したコブからは一目散に日本海へ向け下降していく。クルマの音が徐々に小さくなったと思う間もなく、ひょっこり、「拇海新道登山口」の看板が立つ国道8号線沿いに降

り立つ。長いタフなコースを暑さに耐えて皆よく頑張った！がっしり握手をして記念撮影。更に200mを下り、パンツードンになって親不知の海に飛び込む。やったぞ日本海だ、拇海新道を完



あやめ平



拇海山荘

走したぞ！バシャバシャ万歳！

この夜は、漁師の民宿で海鮮山盛を食べ、酒を浴びて直ぐヒックリ返って寝たのであります。（かくて念願の縦走は終わったのですが、山行から数日経った頃から「拇海新道にいつか一度は行ってみたい」という不思議な感情に時々捉われます。永年想像で作り上げた拇海新道のイメージが余りに強固で、今回は違う山に行っていたと思っているのかも知れません。）

沖縄の山々と一等三角点探訪

西川 元 禧

今年1月、沖縄の山々を訪ねましたので報告します。「沖縄に山が有る？」と言われてそうですが、低山ながら個性的な山が多く結構楽しみました。沖縄4度目の私も登山は初めてで、今回は沖縄本島の主な山々と、10ヶ所ある一等三角点の内、標石が欠落している2ヶ所を除き8ヶ所を探訪しました。但し、沖縄にはマムシの数倍の毒を持つと言われるハブが生息し、しかもマムシは近付けば逃げてくれるのに、ハブは跳びかかってくる事もあるそうなので要注意。

期日：平成 23 年 1 月 10 日(月)～14 日(金)の 5 日間

参加者：友人 3 人と西川元禧(77 歳から最年少の私まで、合計 4 人)

行動記録：

羽田を 8：15 に出発し、11：10 那覇空港到着。レンタカーを借りて南部へ、須久名岳(160m・一等三角点は 148.8m)と、八重瀬岳(163m・一等三角点)に登る。いずれも藪の中の不明瞭な踏み跡を歩く。沖縄の冬は暖かくハブは冬眠しない。気温が比較的低い 1 月は活動がやや鈍くなると聞いたが、適当な長さの木の棒で藪を払いながら歩き、三角点標石を見付けて皆で喜ぶ。ホテルに戻る途中、ひめゆりの塔や健児の塔、世界遺産の斎場御嶽に立寄る。

翌日は沖縄本島の最高峰・与那覇岳(503m・一等三角点は 498m)に向かう。本島北部の原生林ヤンバルの森を歩くので、植生がシダ類の大木、大きな葉のクワズイモ、つる植物等ジャングルの様相で南国の山歩きを楽しむ。続いて少し北の辺野喜ダム近くの西銘岳(420m)にも登る。

3 日目は、本島中部の東側に海中道路で繋がった平安座島を経由し宮城島に向かう。島の最

高所に一等三角点(121.4m・点名は高離島)がある。本島に戻り、途中で世界遺産の勝連城址、首里城に寄りながら、与那城町の与勝高校敷地内にある一等三角点(76m・点名は平敷屋)や弁ヶ岳(165.6m・一等三角点)を探訪した後、名護岳(345m)と嘉津宇岳(452m)に登る。

4 日目は、本部(モトブ)半島の山々、一等三角点の八重岳(453m)、乙羽岳(275m)、円錐カルストの本部富士(240m)、デーサンダームイ(ムイは森の意、230m)にハブに警戒しながら藪の中を登る。八重岳中腹では、我国で最も早い花見が出来る寒緋桜が 3 分咲き程の中を行く。更に多野岳(385m)や一等三角点のクール岳(201m・点名は妙山)にも足を伸ばし、ホテルへ戻る。

最終日は、石川岳(204m)に登った後、那覇市内を散策し、15：10 の便で帰路についた。

全てにスムーズに行かなかったボリビア紀行

川久保 忠通

当会の例会で今まで2回も興味深い南米登山の講演をして下さった茨城県山岳連盟の椎名氏が今度ボリビアの山に登るので参加者を募っていると聞き、私も参加したい旨を告げるとあっさり許可して頂きました。以下はこの時の報告です。

6月24日から7月18日のボリビアの旅で私は情けない事に高山病になり、下痢と食欲不振で数日間自分の肉を食べていたような有様で、4kgの体重減(全体重の7%)となりました。帰宅してシャワーを浴びて鏡で自分の姿を見ましたら、腹筋の部分がシワシワで、80歳の老人の体となっていました。以下は少し長い報告ですが最後まで読んで頂ければ幸いです。

ボリビアの実質上の首都ラパスは直径数10km、深さ600m程度のすり鉢状の地形に約110

万人の人が住み、その一番低いすり鉢の底（標高：3600m）は高層建築の列ぶオフィスや商店・ホテル街で、上部のすり鉢の縁の部分は「エル・アルト」（スペイン語で「高所」の意味）という区域で、比較的所得者の住宅が立っていますが、ここも住民が多く、交通渋滞が日常的で、ラパスからどこに行くにしてもすり鉢の底からこのエル・アルトに駆け上がり、そこから広い平坦な場所をそれぞれの方向に散って行きます。

ラパスの道は殆ど急な登りか下りしかなく、ある程度平らな道と言えば色んな高さですり鉢を周回する道か、どん底にある目抜き通りしかありません。飛行場の標高が4082mで、富士山より200mほど高いので普通の観光客は殆ど高山病にやられます。でも、人間の適応力は大了もので、このような場所でもサッカーコートがあり、サッカーやジョギングをする人の姿が見受けられます。

ボリビア最高峰のサハマ峰（標高：6542m）と、ラパス市街からいつも輝いて見えるイリマニ峰（標高：6439m）に登るために集まった埼玉県と茨城県山岳連盟の合同登山隊（と言えば格好が良いですが60歳以上のリタイヤオジサンの集まり）の7人は6月25日ラパスに着き、市内観光やチャカルタヤ（標高5395mで、かつて世界一標高の高いスキー場がありましたが現在は雪不足で廃業）に高地順応に行った後、6月29日に1日ばかりで車でサハマ村まで移動し、ベースキャンプ、ハイ・キャンプ（5681m）と高度を上げました。

7月2日のアタック日は午前2時出発予定でしたが風が強く1日延期となりました。しかし、午前6時頃には風も収まって来て天気も良くなって来ました。翌日も天気が悪そうとのガイド判断で、なんと午前10時から登頂を開始しました。私は前日から高地でのいつもの持病である下痢（水便）が続き、調子があがらず、5800mくらいでギブ・アップ、他の隊員も一番高く登

った人（2人）は6200mで全員敗退でした。その夜はハイ・キャンプに泊まり、翌日サハマ村に下ったのですが、1人の人は肺水腫となって担架で下ろされ、私もいつもは気持ち良く駆け下りる傾斜を2倍から3倍の時間をかけないと降りられず全身疲労でした。

ラパスには7月4日の夕方帰って来て日本人経営の「一番ホテル」に宿泊しましたが、肺水腫の人はラパスに帰ってすぐ入院、私はホテルに医者が往診に来てくれ大量の薬と、合計3日間の酸素吸入（ちょっと大げさだと思いますが）を受けました。

6日朝、肺水腫の人と私以外は次の山であるイリマニ峰に旅立って行きました。その間、私は体がきつく、ホテルのベッドでNHKの衛星放送TVを見たり、パソコンで写真の整理をしたくらいで、ホテルから動いたのは入院している人の見舞いだけでした。

7月10日にイリマニ峰に行った隊員達が帰って来たのですが、この山もアタック日は風が強く、結局最終キャンプ以上は登れなかったとの事でした。

これで全ての登山活動が終了し、当初の予定通り、入院している1人を除いて私も含めた全員は7月11日の19時のバスでウユニ塩湖の観光に行く事になりました。ところが、ラパスのすり鉢の縁（エル・プラド）の住民のガス不足に対する交通遮断の実力行使で出発出来ず、翌12日の19時出発となり大幅なコース変更となりました。

バスは非常に大きくリクラインシートなのですが、トイレには鍵がかかっている使用出来ず、ほんの数回偶発的に止まるチャンスを利用してバスのドアを開けさせ、バスのタイヤに向かって立ち小便（女性は我慢していたと思います。なでしこジャパンならずとも女性の我慢強さには脱帽です）。バスは暖房が無く、氷点下10度程度の冷凍車、全身バイブレーションのマ

ッサージ付き悪路の難行苦行で13日に朝7時にウユニに着きました。

そこからトヨタのランドクルーザーでウユニ塩湖を120kmほど横断しました。普通なら今の時期は乾期で塩が舗装道路のようになっているのですが、2週間前（丁度我々がサハマ峰に登った期間）に降った30cmほどの大雪（1週間の学校閉鎖になる程の異常気象との事）で塩湖の7割ほどが深さ15cmほどの水がたまり、そこを車がまるで船のように進んで行きました。水の反射率が良く、まるで鏡で、周囲の山々が完全に上下対称になっていて非常に幻想的でした。2日かかりで塩湖を縦横無尽に走り回りすっかり堪能して14日に再び殺人バスに乗り込み15日の朝無事ラパスに着きました。

そして16日の朝3時にホテルを出て、ラパス→サンタクルーズ→マイアミ→ダラスと乗り

継いだ後、ダラスで12時間ほど待って日本時間の13時頃に成田に着きました。

今回の登山と観光は「全ての段階でスムーズに行った事が無い」という、私の今までの経験の中で異例の旅でした。一番の反省点は登山と観光の「二兎追う者は何とやら」になってしまい、高所順応の期間が短く、しかもアタック日には予備日が無かった事でした。日程などを詳しく検討もせず、お客様の気分で隊員に加えてもらった事を猛省しております。

しかしながら、今回の山で十分に自分の限界を知りました。今までは高所での下痢や嘔吐に悩まされながらも何とか誤魔化して登頂して来たのですが、もう歳なのでしょう。三浦雄一郎さんの偉大さがつくづくと分かります。でも自分は平凡な男、これからはせいぜい4000m台の山しか登らない（登れない）と悟りました。

あとがき

編集者から

今年は大変な年でした。新入会員の井上さんも書いておられるように、震災直後は無力感に捕らわれて殆どの方はとても山に行く気持ちになれなかった事と思います。私事ですが、丁度震災の一週間前に安達太良山と吾妻山に山スキーに行き、楽しく帰って来ただけに、震災もさる事ながらその後に来た放射能汚染で福島ของ素晴らしい自然が取り返しのつかない状態になってしまった事が残念でなりません。今まで2回ほど週末に除染の手伝いをして来ましたが、至る所ホットスポットがあり、空間線量も高く、放射線被曝を恐れて家の中に閉じこもっている子供達が震災前の美しい福島の自然の中で遊べる日が何時になったら来るのか見当もつきません。その日が一日も早く来る事を祈るのみです。（川久保）

ネットワーク委員・長岡からのご連絡とお願い

1. 9月にJACのインターネットホームページ（HP）の中に、支部HPを立ち上げました。

<http://jac.or.jp/info/shibudayori/ibarakisibu/list.html>

ご覧頂いてのご意見をお待ちしております。

2. 従前からの、ネットワーク委員としての皆様へのお願いについては、支部報 No.3 と同じです。支部報は、HPにも掲出しております。

3. HPには、支部報のほか、公開講演での使用スライドなどを掲出します。そのために、執筆や発表資料作成に際しては、他者の著作権への配慮をお願いします。著作権については、文化庁による次記などをご参照下さい。

<http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/index.html>

<http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/ref.asp>

「少量の国土地理院地図を挿入」利用する際は、

<http://www.gsi.go.jp/LAW/2930-meizi.html>

なお、不明の場合は、長岡あてご照会下さい。